

## 大伴坂上郎女論 上

岡 田 喜 久 男

などの作者面での多様さとが相俟って、貴重な古代の情報庫となつている。

又三大部立、雑歌、相聞、挽歌に詠まれて、旅、恋、死の三つの主題を考えてみても、今日迄の歌の淵源が『万葉集』にあるのは当然のことである。

然しながら、『万葉集』の著名な歌人（あるいは、少くとも十首以上の歌数を持つ歌人）を考えた場合、決して歌人一人一人が多様な歌を詠んでいるわけではない。むしろ、山上憶良を、思想歌人、人生歌人と呼び、山部赤人を叙景歌人、高橋虫麻呂を伝説歌人と呼ぶように、各歌人の詠歌の主題、内容、修辞は限定され、その特色が個性となり、高く評価されることにも繋つていたのである。歌人一人一人が、その生涯において、『万葉集』に収載されている歌だけを詠んだわけではなからうし、選歌する人（巻々の、或いは最終編纂者大伴家持）の嗜好、立場もあるわけであるから、以上のようなことは、現存の『万葉集』によつての話であることは断るまでもない。然し、少数ではあるが、まことに多様な歌の世界を我々の前に繰り広げている歌人もいる。その第一は、大伴家持であり、第二

『万葉集』の多様性、ということがよく言われる。いや、言われなくとも、事実として広さ、豊かさ、多様さを示している例は少ない。奈良朝後期に成立した、日本最古の歌集であり、最初の勅撰和歌集『古今集』が出現する迄には百数十年の年月が必要だったことを思えば、『万葉集』が古代の作品として、独自の価値を持つことは当然であろう。

現代のマスコミの世界でも、物事の起源、最古の記録として、『古事記』や『日本書紀』なかでも『万葉集』がよく引用される。特に夏の土用の丑の日と大伴家持の「瘦人を嗤咲ふ歌」

<sup>3853</sup>石麻呂に我れ物申す夏瘦せによしといふものそ鯁捕り喫せは名コンビと言ふほかはないが、他にも景勝の地の紹介、動植物と歌、はてはコーシャルソングにまで万葉の歌が登場している。

『万葉集』二十巻、収載歌約四千五百と普通言うのであるが、実際には、歌以外に、漢詩、漢文、書簡、物語の左注、諺、などの資料的な多様さと、天皇、皇后、官僚、兵士をはじめ、遊女、乞食者

が大伴坂上郎女である、と言つても誰からも異論は出ないであらう。  
 『万葉集』四千五百余首の一割強、長歌四六首・短歌四二五首・  
 旋頭歌一首・連歌の上の句一、もの歌数を誇る大伴家持は、その量  
 からいつても質から見ても多様であるのは当然であるが、今は擱く  
 として、大伴坂上郎女について更に詳しく調べてみたい。大伴坂上  
 郎女（以下多くの場合郎女と略記する。）は、長歌六首・短歌七七首  
 ・旋頭歌一首の計八四首の歌を詠んでいて、歌数からみても、大伴  
 家持、柿本人麻呂に次ぐ詠歌数である。のみならず、以下に述べる  
 ように、家持を除けば他に類が無い位、集中に資料の記事が多い。  
 そして、郎女の作品を丹念に見て行くと、彼女の人生と作品が深く  
 関わり合っていることが分り、多様な作品が大伴家の中心的婦人  
 （家刀自）の人生の、一コマ一コマを浮かび上らせているのである。

二

まず最初に郎女の作品を、題詞（題詞にある歌数は特別の場合以外  
 除いた）と左注によつて列記してみる。（歌番号は『国歌大観』  
 による。またゴチックは長歌の番号）

- (1) 大伴坂上郎女、神を祭る歌 (379・380)  
 右の歌は、天平五年冬十一月を以ちて、大伴の氏の神に供へ祭  
 る時、いささかこの歌を作る。故に神を祭る歌といふ。
- (2) 大伴坂上郎女、親族を哀する日に吟ふ歌 (401)
- (3) 大伴坂上郎女の橘の歌 (410)
- (4) 七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願が死去れるを悲しび嘆きて  
 作る歌 (460・461)

右は、新羅国の尼、名を理願といふ。遠く王徳に感じて聖朝に  
 帰化す。時に大納言大將軍大伴卿の家に寄住して、既に数  
 紀を運たり。ここに天平七年乙亥を以ちて、忽に運病に沈み  
 て、既に泉界に趣く。ここに大家石川命婦、餌薬の事に依りて  
 有間の温泉に往きて、この喪に会はず。ただ、郎女独り留りて  
 屍柩を葬送すること既に訖りぬ。よりにてこの歌を作りて温泉に  
 贈り入る。

- (5) 大伴郎女の和ふる歌 (525く528)  
 右、郎女は、佐保大納言卿の女そめ。初め一品穂積皇子に嫁ぎ、  
 寵びをうくること儻なし。皇子薨りましし後、藤原麻呂大  
 夫この郎女を嫂ふ。郎女は、坂上の里に家む。よりにて族氏号け  
 て坂上郎女といふ。
  - (6) また、大伴坂上郎女の歌 (529) 〈旋頭歌〉
  - (7) 大伴坂上郎女の歌 (563・564)
  - (8) 大伴坂上郎女の歌 (585)
  - (9) 大伴宿禰稻公、田村大麿に贈る歌 (586)  
 右一首、姉坂上郎女の作。
  - (10) 大伴坂上郎女の怨恨の歌 (619・620)
  - (11) 大伴坂上郎女の歌 (647)
  - (12) 大伴坂上郎女の歌 (649)
- 右、坂上郎女は、佐保大納言卿の女そめ、駿河麻呂は、この高市  
 大卿の孫そ、両卿は兄弟の家、女と孫とは姉姪の族そ。ここを  
 以ちて、歌を題し送り答へ、起居を相問ふ。

- (13) 大伴坂上郎女の歌 (651・652)
- (14) 大伴坂上郎女の歌 (656・661)
- (15) 大伴坂上郎女の歌 (666・667)
- 右、大伴坂上郎女の母、石川内命婦と、安倍朝臣虫満むしまつの母安曇外命婦とは、同居の姉妹、同氣の親おやそ。これによりて郎女と虫満と、相見ること疎うとからず、相談かたふこと既に密こまかなり。いささか戯れの歌を作りて問答をなすそ。
- (16) 大伴坂上郎女の歌 (673・674)
- (17) 大伴坂上郎女の歌 (683・689)
- (18) 天皇に献る歌一首 大伴坂上郎女、佐保さいほの宅のにありて作る。(721)
- (19) 大伴坂上郎女、跡見庄とみのたどころより、宅いへに留ひまれる女子むすめ大嬢に賜ふ歌 (723・724)
- 右の歌は、大嬢の進すすむる歌に報へ賜ふそ。
- (20) 天皇に献る歌二首 大伴坂上郎女、春日はるひの里のにありて作る。(725・726)
- (21) 大伴坂上郎女、竹田の庄たけのたどころより女子むすめ大嬢に贈る歌 (760・761)
- (22) 冬の十一月に、大伴坂上郎女、帥すけの家を発ちて道に上り、筑前の国の宗像の郡の名尾ななこの山を越ゆる時に作る歌 (963)
- (23) 同じき坂上郎女、京に向う海道うみちにして、涙の貝を見て作る歌 (964)
- (24) 大伴坂上郎女、姪家持まひの佐保より西の宅かへに還かへるに与ふる歌 (979)
- (25) 大伴坂上郎女の月の歌 (981・983)
- 右の一首の歌は、或いは曰はく、月の別またの名をさらえをとこといふ、此の辞に縁りて此の歌を作るといへり。

- (26) 大伴坂上郎女、元興寺の里を詠む歌 (982)
- (27) 同じき坂上郎女の初月の歌 (993)
- (28) 大伴坂上郎女、親族を宴する歌 (995)
- (29) 夏の四月に、大伴坂上郎女、賀茂神社を拜み奉る時に、すなはち逢坂山を越え、近江の海を望み見て、腕頭うでくづに還り来て作る歌 (1017)
- (30) 十一年己卯に、天皇高田の野に遊獵し給ひし時に、小猷都里みやとの中に泄走す。ここに、適勇士に値ひて生きながら獲らえたり。即ち此の猷を以ちて御在所に、献上るに副ふる歌一首 猷の名は、俗にむさぎのといふ。 (1028)
- (31) 右の一首は、大伴坂上郎女の作なり。但し、奏を経ぬに小猷死し斃れぬ。これに因りて歌を献ることを停む。
- (32) 大伴坂上郎女の柳の歌 (1432・1433)
- (33) 大伴坂上郎女の歌 (1447)
- 右の一首は、天平四年三月一日に佐保の宅にして作る。
- (34) 大伴宿禰坂上郎女の歌 (1450)
- (35) 大伴坂上郎女、筑紫の大城の山を思ふ歌 (1474)
- (36) 大伴坂上郎女の霍公鳥の歌 (1475)
- (37) 大伴坂上郎女の歌 (1484)
- (38) 大伴坂上郎女の歌 (1498)
- (39) 大伴坂上郎女の歌 (1500)
- (40) 大伴坂上郎女の歌 (1502)
- (41) 大伴坂上郎女の晚き萩の歌 (1548)

- (42) 大伴坂上郎女、跡見田庄とみのたごうにして作る歌 (1560・1561)
- (43) 大伴坂上郎女、竹田たけのの庄にして作る歌 (1592・1593)
- 右は、天平十一年己卯の秋の九月に作る。
- (44) 大伴坂上郎女の和なごふる歌 (1620)

右の二首は、天平十一年己卯の秋の八月に作る。

- (45) 大伴坂上郎女の歌 (1651)
- (46) 大伴坂上郎女の雪の歌 (1654)
- (47) 大伴坂上郎女の歌 (1656)
- (48) 大伴宿祢家持、天平十八年の閏七月、越中国の守に任まげらえ、即ち七月を以ちて任所に赴く。時に姑大伴氏坂上郎女の、家持に贈る歌 (3927・3928)
- (49) 更に越中国に贈る歌 (3929・3930)
- (50) 姑大伴氏坂上郎女、越中の守大伴宿祢家持おくに來贈る歌 (4080・4081)
- (51) 京師みやこより來贈する歌 (4220・4221)
- 右の二首は大伴氏坂上郎女、女子大嬢ひすめに賜ふ。
- 以上繁を厭わず全ての用例を挙げたのは、万葉中における大伴坂上郎女像を正しく捕えるのに必要であると確信すると同時に、部分的な引用では見えない、巻別の歌数や資料の在り方、題詞の書き方のパターン等が明白になるからである。
- さて右の、作品の題詞と左注によって示される事柄を整理してみたい。
- まず、第一に歌の主題と場について調べると次の四類にまとめられる。( ) 付の番号は右の題詞に付けたものと同じ)

- (ア) 相聞歌 (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (19) (21) (22) (23) (24) (34) (35) (39) (40) (44) (47)
- (48) (49) (50) (51)
- (イ) 景物の歌等 (3) (25) (26) (27) (29) (31) (32) (33) (35) (36) (37) (41) (42) (43) (45) (46)
- (ウ) 大伴氏関係の歌 (1) (2) (4) (28)
- (エ) 天皇への献歌 (18) (20) (30)

(ア)の相聞歌は、相聞の原義とされる「互に問う」の意でまとめたのであるが、歌数で五三首(長歌四首・旋頭歌一首・短歌四八首)、(イ)は柳・初月等の景物歌や自然詠で、短歌のみ二一首、(ウ)は大伴氏の為に、或いは大伴氏の人々に向けての歌で、六首(長歌二首・短歌四首)、(エ)は大伴氏を代表する場合もあったろうが、献る相手が天皇である特殊性から独立させた。短歌四首。(30)は未奏上ではあるが、その動機から(エ)に入れた。

この四類に分けた基準が一定していないので異論も多いと思うが、少くとも次の事は言えると思う。

a. (ア)の内容は、必ずしも恋愛を歌ったものばかりではないが、長歌、旋頭歌、短歌の三体を使い、多数の歌(全体の63%)が相聞歌である上に、(ウ)の大伴氏関係歌に入れている、「神を祭る歌」(379)の反歌

380 木綿ゆ昼手に取り持ちてかくだにも我れは祈こひなむ君に逢はじ  
かも

や(エ)の天皇への献歌(天皇は聖武天皇)、

725 にほ鳥の潜かづ池水心あらば君に我が恋ふる心示さね

726 外に居て恋ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鴨にあらま  
しを

などを見て分るように、相聞歌風の、それぞれ恋愛的情緒を漂わせる詠みぶりが極めて多い。

b、景物の歌等としてまとめた歌の詠歌対象であるが、橘、月、元興寺の里、初月、近江の海、柳、梅の花、呼子鳥、筑紫の山城の山、霍公鳥、晚秋、秋萩、伏す鹿、沫雪、などがあり、月雪花鳥を含んでいることはもとより、「晚秋」(1548)あるいは、「沫雪と梅の初花」(1651)、「松蔭の浅茅が上の白雪」(1654)と、いやが上にも風情のあるものを詠もうとしていることが分る。

c、(ウ)は、郎女の個人的な立場を離れた場での歌を挙げたのであるが、(四)の天皇への献歌も又これに含まれて当然であろう。(4)の親羅の尼理願への挽歌は、郎女の長歌中でも最大の五三句に及ぶ力作であると同時に、母であり大伴氏の最高の女性であった石川内命婦に代って一族を切り廻している姿が窺える。又(1)の「神を祭る歌」

(2)の「親族を宴する」歌も、他に例が少なく、女性として一族の中心的存在であることを示している。

題詞と左注によって示されている第二の点は、その豊かな記録性にあると言えよう。他のいかなる著名な歌人(ただし、この場合も先程と同じ理由で大伴家持を除かなくてはならないが)も、これ程までに、作者自身が記録されている例はない。そして、古来この点について、郎女研究は最も詳細な考察が為されたのである。

まず(649)の左注によって、郎女の父は、佐保大納言と呼ばれた大伴安麻呂であったことが分る。安麻呂は壬申の乱に参戦し、天武天皇崩御の際は「しののこにたてまつる」とある人で、式部卿・参議・大宰帥等を歴任し、和銅七年五月、「大納言兼大將軍正三位大伴宿祢安

麻呂薨。帝深悼之。詔贈<sub>ニ</sub>從二位<sub>一</sub>。安麻呂、難波朝右大臣大紫長徳之第六子也。」と「続日本紀」に記録されている。「万葉集」に確實なものとしては二首の短歌を残しているが、それは、

大伴宿祢、巨勢郎女を媿ふ時の歌一首

101 玉葛実ならぬ樹にはちはやぶる神そ着くとふならぬ樹ごとに

巨勢郎女 報へ贈る歌一首

102 玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が恋ひにあらめ吾は恋ひ思ふ

と、坂上郎女の母との次の贈答の歌である。

大納言兼大將軍大伴卿の歌一首

517 神樹にも手は触るとふをうつつたへに人妻と言へば触れぬもの

かも

石川郎女の歌一首即、佐保大伴の

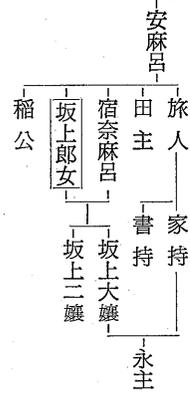
518 春日野の山辺の道を恐ろしく通ひし君が見えぬころかも

二首ともに「神」を出して詠んでいる点、詠みの調子が軽く、上の句と下の句に類似の語句が見出されるなど二首に共通の要素が見出されるが、それにもまして、堂々と人妻に迫る情熱は流石大將軍と云うべきであろうか。とにかく、父・安麻呂と母・石川内命婦との間の激しい恋の結果、坂上郎女が生れたのである。

母については(667)の左注に「大伴坂上郎女の母石川内命婦」とあるが、内命婦とあることから、四位・五位の女官であったことが分る。天皇に献る歌が郎女に見られ、しかもその歌が、いずれも自宅から奉る型で、極めて親しげな詠みぶりであるのも、母を通して天皇と繋がるのが屢々あったのではないかと思われる。

ここで大伴氏の系図と、右の(1)~(6)までの事例から分る郎女の身辺を表にまとめてみよう。

天忍日命：日臣命（道臣命）…室屋…談  
 金村—昨—長徳（馬飼）—御行—駿河麻呂



大伴坂上郎女年表

西曆	天皇	年号	坂上郎女の歌と関連事項	年令
六九六	持統	十年	誕生はこの前後か この年誕生説あり	
七〇一	文武	元年		
七〇八	元明	元年	六月、但馬皇女没（穂積皇子との恋で有名）	
七一四	和銅	元年	五月、父・安麻呂没	
七一五	元正	元年	七月、穂積皇子没	
七二一	元正	五年	六月、藤原麻呂・左京大夫となる。 「和ふる歌」(525~528)	26才
七三〇	聖武	二年	十一月、大宰府を出発(963) (964)	35才
七三一	聖武	三年	七月、異母兄・大伴旅人没(67才)・家持(14才)	36才
七三二	聖武	四年	三月、郎女の歌(1447)	

(この年誕生として年令を考えた)

七三三	〃	五年	「家持に与ふる歌」(979)・「月の歌」(981~983)・「元興寺の里を詠む」(992)	38才
七三七	〃	七年	「初月の歌」(993)・「親族を宴する歌」(995)十一月、「神を祭る歌」(379・380)	
七三五	〃	九年	「尼理願を悲しぶ歌」(460・461)	
七三九	〃	十一年	「近江の海を見ての歌」(1017)七月、藤原麻呂没(43才)	
七四六	〃	十八年	「未奏上の歌」(1028)	
七四八	〃	二十年	八月、「和ふる歌」(1620)九月、「竹田の庄にて作る歌」(1592・1593)	
七五〇	〃	天平勝宝二年	閏七月、「家持に贈る歌」(3927・3928)三月、「家持に贈る歌」(4080・4081)「大鑿に賜ふ歌」(4220・4221) 郎女集中最後の歌	55才 53才 51才

大伴氏は、天孫降臨の時武装して先導したと伝える天忍日命をその始まりとし、神武東征の際にも、「大伴連等の祖、道臣命」が大和への道先導したと記紀にもあるように、古来天皇に従って軍事的な働きで功を立て、壬申の大乱にも長徳の弟の馬来田と吹負が天武天皇方で活躍し家運は上昇した。御行、安麻呂、旅人はいずれも大納言となり、藤原不比等とその四人の子(武智麻呂・房前・宇合・麻呂)に匹敵する勢力を示したが、大宰帥として旅人が都を離れ、帰京後天平三年に没してからは藤原氏に圧倒され(もちろん大伴氏だけではないが)その子家持は中納言どまりであった。旅人が亡くなった時家持はまだ十四才であった。資料<sup>100</sup>で分るように郎女は、旅人の妻が大宰府で亡くなった後、旅人の世話をする為に大宰府へ赴き、十才位の家持も育てたのであった。

年表からみても、年代の分る郎女の歌は、天平五年から急に多くなる。母石川内命婦はまだ存命であったが、(4)の「尼理願を悲しぶ歌」(460・461)の左注にあるように、天平七年には病氣療養で有間温泉に行く身であったから、郎女は天平年中には、既に大伴家の重要な出来事を背後から支える婦人となって活躍していたことは確かである。その結果が、天平五年以降の歌によく示されていて、「親族を宴」したり、「神を祭」るなどの氏族内行事が歌われている。

三

以上、大伴坂上郎女の「万葉集」における多様性を、資料的な面から押えてみたのであるが、その歌自身については全く触れなかった。以下では、専ら郎女の歌の多様な変化を述べてみたい。(尚内容に深く立ち入るのは次稿に譲る)

ところで、郎女の詠んだ歌体は、長歌・短歌・旋頭歌であるが、

女性でこの三種の歌体を詠んだ人は郎女一人である。男性歌人でも、大伴家持、高橋虫麻呂、山上憶良だけで、もし柿本朝臣人麻呂歌集の旋頭歌の何首かは人麻呂作だとすると、柿本人麻呂を加えることが出来るが、極めて少数の人しか一人で三種の歌体を『万葉集』には残していない。

次に、女流歌人と長歌について考えてみる。『万葉集』全体でも長歌は二百六十余首であるから、当時すでに人々が競って歌った歌体ではなかった。その為でもあるが、名前の分る女性で長歌を作った人は、額田王三首が多い方で、孝謙天皇、車持氏の娘子、遣唐使の親母、持統天皇、丹生王、間人皇女、倭太后、がそれぞれ一首、また女性とだけ分る、娘子をよめ、婦人にしても各一首詠んだだけである。この他、郎女の娘・坂上大嬢は、

家婦の、京に在す尊母に贈るために詠へらえて作る歌 (4169・4170)

の題詞からも分るように、夫・家持に長歌を代作してもらっている。総体的に女性が長歌を好まなかったと言えらると思うが、その中であつて、郎女が六首の長歌を残しているのは大きな特徴である。

次に旋頭歌について見ると、この歌体は集中に六二首しかなく、名前の分る歌人で旋頭歌を作った人は、山上憶良 (1538) ・藤原八束 (1547) ・大伴稻公 (1549) ・丹生女王 (1610) ・高橋虫麻呂 (1744) ・壬生宇太麻呂 (3612) ・大伴家持 (4026) 、と名前は分らないが特定出来る元興寺の僧だけで、いずれも一首だけであるから、郎女がたとえ一首だけでも詠んでいるのは大きな特色である。

即ち、郎女の歌の歌体だけを見ても、郎女は他の女流歌人と比較

して多彩であると言えただけでなく、全ての万葉歌人の中に在って多様であつたと言えよう。

次に歌の主題と内容について考えたい。先に四類に分けた時述べたように、相聞歌が最も多く、最後まで詠み続けているが、更に詳しく見ると、相聞の対像も色々である。

(a) 相手の分る恋の歌 (5) (6) (7)

(i) 娘婿 (大伴家持・大伴駿河麻呂) への歌 (8) (11) (12) (13) (14) (24) (44) (49) (50)

(5) 娘・大嬢への歌 (19) (21) (51)

(e) 抽象的な恋の歌 (10) (17) (22) (23) (24) (33) (39) (40)

(k) 親族間の歌 (15) (16) (47)

(ka) 代作の恋の歌 (9)

普通の歌人で相聞歌があると言えば、(a)の恋人に対する歌が多く、その極致が、大伴家持に恋心を訴え続けて、二九首の歌を捧げた笠女郎であり、越前国に流された恋人中臣宅守に情熱的な恋の歌二三首を贈った狭野弟上娘子などである。川田順氏が『万葉集大成』10の「大伴家持」の中で

坂上郎女が穂積皇子に初婚し、麻呂に再婚し、宿奈麻呂に三婚したまでは史実である。その後老婆となり終るまでの間に於いて、おのれの娘 (坂上弟嬢) への求婚者大伴駿河麻呂と肉交し、大伴百代とも中年の恋をささやき、異母兄の旅人にも嫁したらしい。なほ試みに大日本史列伝の部を見ると「大伴の安麻呂の次女なり。頗る色を好む。……」とあるが、記事不正確の点あるも参者に値する。要するに穂積皇子に娶られた時代だけが純真の女性

であつて、皇子薨後の彼女の生活は、万葉女流中随一の放縱多淫者、平安朝和泉式部一味の紅袴者流といへども既で逃げ出さねばなるまい。

と敵しく指弾されたのも、彼女に相聞歌的作品が多く、その題詞と左注を忠実に実生活に結びつけて解釈した上での論であつた。これに対しては久米常民氏が『万葉集の文学論的研究』の中で

坂上郎女に、恋歌若しくはそれにまぎれるような作品の多い事は認める。しかし、だからといって、この女流歌人が、多淫・多情な女性であつたとする議論には、賛同しかねるのである。寧ろそれとは逆に連続する三つの不幸な恋愛・結婚の経験は、彼女を愛情の「生活」に対しては臆病にしたと思われ、それがために、その作品が、「文学」として愛情のみずみずしさを生涯失わなかつたと考へるのである。

と述べられ、伊藤博氏が「万葉集の歌人と作品」の「天平の女歌人」の中で、郎女の相聞歌、贈答歌を繰返して「恋物語」「文学的虚構」と捉えられた考へが今日では正しいとされているようである。私も右二氏の論に賛成するのであるが、(あ)から(め)までの分類によつても、郎女の相聞歌が純粹な恋愛歌だけではない事が窺える。

(め)に入れた中で、(5)の左注は郎女の資料として最も基本的かつ有名なものであるが、恋愛の歌としてもこれだけが(525~528) 両者(藤原麻呂と郎女)の愛情の確かさが感じられるものである。

然し、既に屢々指摘されているように、四首一組の歌は、柿本人麻呂の「輕皇子、安騎の野に宿ります時」の歌の反歌(ここでは短歌とある) 四首(46~49)、磐姫皇后の歌四首(85~88) などの

ように起承転結の連作意識のもとに作られたものがあり、郎女のこの四首も單純な「和ふる歌」ではない。とくに「転」にあたる

527 来むと言ふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じ  
と言ふものを  
を見ればそれがよく分ると思う。

(7)の大伴百代に返した二首(563・564)は、百代の「恋の歌四首」に対してなので(め)に入れたが、實際は兩人が「老男」「老女」になつて詠んだものであるのは、伊藤博氏が前掲書「天平の女歌人」の中で

これも例によつて、百代が「恋する老男」に、郎女が「恋する老女」になりきつて、「老」の「恋歌」を交したものと見るべきである。

と述べられている通りであろう。

(い)は郎女が、娘大嬢の婿である家持へ(8)(24)(44)(48)(49)(60)を、娘二嬢おとの婿である(47)の題詞で分る)大伴駿河麻呂へ(11)(12)(13)(14)を贈つたものであるが、他の万葉女流歌人で、名前の分る娘婿へ歌を贈つた人などはない。然し、当時子供の結婚に大きな力があつたのは母親であつたから、歌人である郎女が二人の娘婿に対してこれ等の歌を残しているのはむしろ当然である。当然あるべき歌が残っている点が郎女の大きな特色である、と言ふべきであらうか。

(5)は娘・大嬢への歌であるが、右に述べたことと同じように、母親の立場で娘に歌を贈っている例も万葉では少なく、或いはあるのかもしれないが明確には知り得ない。大体において、親が子のことを歌にする例は、山上憶良が大変よく知られているので、集中多い

ように思われているが、実際は極めて少ない。殆んど山上憶良のみが目立つ位で、まして母親が高らかに娘に歌を歌いかけるといふのは郎女だけである。

(x)にまとめた相聞歌は、その相手が特定し得ないと私が考える類のものであるが、(0)の「怨恨の歌」(619・620)、(2)の大宰府からの帰京時の作などは、詠んだ相手について諸説がない訳ではない。

「怨恨歌」については、藤原芳男「ねもころに君が聞こして」万葉二六号をはじめ特にその相手を探る試みが為されているが、私は小野寺静子氏の「怨恨の歌」万葉七九号に代表される、特定の相手に対してでないとする説に全面的に賛成である。ただし郎女の恋愛・結婚の人生経験が裏にあつて詠まれたのであるから全くの仮空の作と言えないとも言えようが、帰京時の二首(963・964)も時期から言えば異母兄大伴旅人への歌と考えられるが、次稿で述べようと思うが、内容から考えてこの歌も特定の男性への「恋」を歌つたものではないと思う。

(y)はいとこ安倍虫麻呂との「戯歌」と、冬の相聞に入れられた、恐らく近親者との酒宴に供された

1656 酒杯に梅の花浮け思ふどち飲みての後は散りぬともよし

である。郎女と安倍虫麻呂は、母同志が「同居の姉妹」とあるから、子供同志も幼少の頃から親しかったし、何でも言い合える間柄だった。次の歌も

666 相見ぬは幾久さにもあらなくにここたく我れは恋ひつつもあ  
るか

のように一見恋愛関係にある者の歌に思はれるが、左注によれば、

実はまことにほほえましい近親者間の歌であることが分る。この事実は、短歌の表現の限界を示すとともに、『万葉集』の作歌事情の分らない歌の解釈の可能性の広がりをも感じさせる。いずれにしても、右のような歌を詠む郎女の、人間的な存在感の豊かさが伝わってくるのである。

(y)は、郎女と同腹の兄弟かと思われる、大伴稻公に代つて、異母兄宿奈麻呂の娘・田村大嬢に贈つた歌であるが、代作歌自体は当時珍らしいものではなかった。『萬葉集全注』巻第四・木下正俊著のこの歌(586)の考に

この左注は坂上郎女が弟の稻公の代作をしてやったことを知っている者の記入である。家持の聞き書きであろう。稻君自身の歌も巻八(一五五三)にあるが平凡作と言つてよい。この歌も、歌才に乏しい弟の拙さを見かねた姉が代役を買つて出たものと思われる。それにしても単調で新味がなく、坂上郎女もわざと手を抜いたのかもしれない。男女贈答の一面を物語つて興味深い注記である。

とあるように、いかにも歌才に恵まれた郎女の仕出しそうな、そして興味深い記録であると思う。

以上、私が相聞歌と思う歌を更に分類検討すると、いかに多様な契機によつて、郎女の歌が詠まれたかが分つてきた。そして、その多様な歌を詠むことが郎女に出来たのは、またその事実を我々が知り得るのは、次の三つの要因によると思う。

第一に、大伴家持が最終編纂者だと思つて、その家持と郎女は甥と叔母の関係にあり、娘の婿ともなつた家持が豊富な資料と見聞を

記録したという幸運な事実。

第二に、大伴家の家刀自的な存在であった郎女は、晴の場で活躍する機会が多く、又それを歌にする才能を持っていた。

第三に、郎女自身の虚構を好む性向と、現実を逃避しようとする気持とが、多様な歌の世界を切り開いた。

右の三点について、更に詳しく述べ、歌の内容を分析することは次稿に譲り、本稿では、多様な郎女の資料性と、その実態の指摘にとどめることにする。